



TITLE:

<書評>風間計博・中野麻衣子・山口裕子・吉田匡興共編著:『共在の論理と倫理--家族・民・まなざしの人類学』はる書房、2012年、2,800円＋税、467頁

AUTHOR(S):

西, 真如

CITATION:

西, 真如. <書評>風間計博・中野麻衣子・山口裕子・吉田匡興共編著:『共在の論理と倫理--家族・民・まなざしの人類学』はる書房、2012年、2,800円＋税、467頁. コンタクト・ゾーン 2014, 6(2013): 201-205

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198479>

RIGHT:

Contact Zone 2013 書評

風間計博・中野麻衣子・山口裕子・吉田匡興 共編著
『共在の論理と倫理
——家族・民・まなざしの人類学』

はる書房、2012年、2,800円＋税、467頁

西 真如

本書は、「人と人が共に在ることの論理と倫理」というテーマに対して、家族、先住民、周辺社会、国家、メディア、アートといった多様な切り口からアプローチを試みた論集である。

人類学者にとって共在の論理を探究することは、第一義的には社会の成立と維持に関わる規範を、当の社会に内在する論理として抽出することであろう。そこではもちろん、家族および親族組織の研究が重要な役割を果たしてきた。他方で、いかなる共同性もそこから排除された他者の存在なしには成立しえない。家族は排除や抑圧の問題とは無縁ではないし、人類学者が研究対象としてきた人々の中には、現代国家の枠組みの中で否応なく周辺社会として位置づけられている例も少なくない。

本書の執筆者はいずれも、家族理論や周辺社会の研究で知られる清水昭俊の教えを受けている。本書の狙いは、清水の理論を現代的な文脈で再検討しながら、共同性を成立せしめる「共在の論理」と、共同性の成立過程で排除あるいは抑圧された他者との対話すなわち「共在の倫理」とを、表裏一体のものとして描き出すことにある。

本書は16本の論考を4部にわけて構成しており、家族および集团的紐帯の再検討を通して「人のつながり」について論じた第1部、先住民あるいは周辺社会を題材として「抑圧と周辺性の諸相」を検討した第2部、選挙、ジャーナリズム、アート等を題材に「まなざしの交差する場」を描いた第3部、現代社会において人類学が果たしうる役割について、いわゆる応用人類学の検討を通して「再構想」を試みる第4部からなる。これに清水による寄稿1編と、随想1編が加わる。

第1部「人々のつながり」は、次の5つの章からなる。第1章「モノのやりとりと「家族」の紐帯——パプアニューギニア・アンガティヤでの人のつながり方の一断面」（吉田匡興）は、パプアニューギニア東部高地のアンガティヤ社会における食物をはじめとしたモノのやりとりが、「呪術的な」関係としての家族・親族的紐帯の構築に関わっていると論じる。第2章「提喩的想像の多層性——ガーナ南部における「われわれ」の生成」（浜田明範）は、「われわれ」意識を提喩的な想像としてとらえる清水の議論を踏まえ

201

つ、ガーナで「プランカシ」を名乗る人々のカテゴリーがどのように維持されているかを論じる。浜田によれば、「プランカシの人々」という想像に代表される提喩的關係は、親族關係に代表されるような換喩的關係を更新するきっかけとなり、換喩的關係は再配分構造を經由して提喩的な想像を生成するのである。第3章「家屋を建てる——旧ソ連領中央アジア・北部クルグズ農村における世帯形成とキョウダイ」（吉田世津子）は、北部クルグズ（キルギス）の農村における家族・親族關係について、結婚を起点とする世帯形成の過程とキョウダイ關係に着目して考察する。結婚にともなう新たな世帯形成は、従来のキョウダイ關係に裂け目を生じさせるが、同時に世帯形成への助力を通してキョウダイ間の横の關係を継ぎ直す契機ともなる。第4章「ドメスティックへと囲い込む暴力——日本のDV被害者支援の現場から」（桑島薫）は、日本のドメスティック・バイオレンス（DV）被害者に対する支援活動の事例を通して、DVは単に「私的領域」で生じる暴力なのではなく、被害者を私的領域へと「囲い込む」力であると指摘する。その上で「囲い込み」の規制を破る契機、すなわち被害者が暴力から「逃げきる」ことを可能にし、支援者が関与する機会をつくりだす契機を見いだそうとする。第5章「家・生殖・モダニティ——現代韓国の「家（カジョク）」に関する人類学的理解の試み」（岡田浩樹）は、今日の韓国の家族が、伝統的な「家」（チプ）の制度に「私的な生殖の場」としての近代家族を組み込んだアマルガムとして出現したと論じる。

第2部「抑圧と周辺性の諸相」は、次の5つの章からなる。第6章「バナバ人ディアスポラによる二つの故郷の同一化——集合的記憶の操作による先住性の領有」（風間計博）は、植民地政府の謀略によって故郷のバナバ島（キリバス領）を追われたバナバ人が、移住先のフィジー領ランビ島において集合的記憶の操作を通して「先住性」を創出し新たな故郷の保有を正当化してきたことを明らかにする。ランビ島のバナバ人は、フィジー系住民のあいだで高まる排他的ナショナリズムの影響を受けつつ、バナバ人のエスニックな固有性と、忠実なフィジー国民としての立場とを同時に強調することで、新たな故郷の領有を確保しようとする。第7章「「植民地」という状況——カナダ先住民サーニッチが「インディアン」として現代を生き抜くということ」（渥美一弥）は、カナダ先住民としてのサーニッチの経験を、伝統復興運動がもたらす先住民社会内部の葛藤に目を向けながら考察している。第8章「植民地支配と大量虐殺、そして文化的ジェノサイド——中国の民族問題研究への新視座」（楊海英）は、中国と日本の支配下に置かれた近代内モンゴルの経験を踏まえつつ、中華人民共和国による内モンゴル支配を「文化的ジェノサイド」と位置づける。その上で、「滅びゆく伝統文化」を掬い上げる行為に自らを縛りつけ、「滅ぼす暴力」に目をつぶってきた「サルベージ人類学」の欺瞞性を指摘している。第9章「「中心」を希求する周辺社会——インドネシア東南スラウェシにおける国家英雄推戴運動から」（山口裕子）は、現代インドネシアにおいて幾重にも周辺化された人々であるブトン人が、自らの歴史の中に国家的「英雄」を見いだし、国家の承認を得ようとする運動を取り上げる。この運動は、共産主義運動の拠点という烙印を消し去り、現在の「グローバルな」世界の中に位置を得ようとするブトン人の試みの一部なのであるという。第10章「伸縮する遠近——モンゴル＝キルギス人の現在」（シンジルト）は、新疆西北部のモン

ゴル＝キルギス人（モンゴルの影響を受けて仏教を信仰するキルギス人）が集団として形成された歴史過程を踏まえて、現在のモンゴル＝キルギス人が持つ「両義的」で「伸縮する」民族観について考察する。その上で、モンゴル＝キルギス人を「周辺民族」として規定する研究者や中国政府とは異なる視点から、中央アジアで生活する集団の交渉について考えることを促す。

第3部「まなざしの交差する場」は、次の4つの章からなる。第11章「選挙とジャーナリズム——ベナン大統領選挙をめぐる語りの多様性について」（田中正隆）は、民主化（一党支配から複数政党制への移行）後のベナンにおける大統領選挙戦に着目しつつ、現地メディアの関与が転換期のベナン社会に映し出す「政治的なもの」の現在を考察している。ネイティヴ・エリートの一員でもあるベナンのジャーナリストは、一方ではジャーナリズムに対する民衆からの疑念のまなざしを感じ取り、他方では政治権力者からの抑圧と誘惑に晒されながら、自らの立ち位置を見定めようとしている。第12章「不安定な今を生きる——ケニアの人々が語る「2007年選挙後暴動」と国際刑事裁判」（古川優貴）は、ケニアの2007年選挙後暴動が映し出す「不安定な今」について、現地の人々の語りにもとづいて論じている。暴動後の和解という問題に直面する人々は、「ICC問題（選挙後暴動への関与を疑われた国会議員らがハーグの国際刑事裁判所（ICC）に召還された問題）」、「キリスト教信仰」、「部族の伝統」といった多様な判断材料を参照しつつ、彼らが生きる不安定な世界を理解しようとする。第13章「イメージが作る工房、工房が作るイメージ——タンザニア・アートの制作現場」（岩崎明子）は、マコンデ彫刻やティンガティンガといったタンザニア・アートに対する消費者のまなざしが持つ両義性を明らかにするとともに、それら作品の制作に関わる現地の彫刻師や絵描きたちの置かれた労働環境について論じている。第14章「不可視の暴力と「バリ文化」——モダニズムをめぐる言説の一面」（中野麻衣子）は、インドネシアのバリ社会において、移民労働者への暴力が不可視化されている状況に目を向け、暴力を正当化する文化的装置の存在を確認した上で、バリ知識人による「自省的批判」の可能性とその限界について論じている。

第4部「人類学の再構想」は、第15章「別様でもありえた学、別様でもありうる学——作動中の人類学をめぐる試論」（伊藤泰信）および第16章「忘却のかなたのエヴァンズ＝プリチャード——「共犯」の人類学へ」（関根久雄）の2つの章からなる。企業を対象通した産業系エスノグラフィーや、開発実践の人類学は、人類学を再構想する試みにおいて、どのような位置を占めるのだろうか。伊藤と関根は、マリノフスキーの実用人類学の構想にまでいったん遡って、この問題を検討している。両者に共通するのは、現実世界に対する批判の学としての人類学を継承しつつ、人類学者と世界との新たな関わり方を模索する必要があるという問題意識であろう。現にこの世界で「作動中の」人類学をいかに評価しうるかという視線のもとで実用（応用）人類学を論じる立場は、たいへん有効なものであるように思われる。

以上の各部に続いて、清水昭俊による寄稿「民の自己決定——先住民と国家の国際法」が収められている。清水は2007年に採択された国際連合先住民権利宣言を読み解くことを通して、先住民と国家との関係をラディカルに変革する思考を喚起する。国連宣言に

において先住民は、マイノリティに属する個人としてではなく、自己決定の権利を有する「民」として承認されている。この事実は、自己決定の主体として先住民と国家とは同権であるという原則の承認へと道を開くものであると清水は論じている。

共在の論理と倫理というテーマは重いものであり、それに対して各章に割り当てられた紙幅は限られていることから、執筆者は各々が提起した問題に対して、必ずしも十全な議論を展開しているとはいえない。にもかかわらず、本書は以下に述べるような、幾つかの興味深い論点を提起しており、それらは幅広い世代の人類学者、および人類学に関心のあつた読者にとって有益なものである。

本書の面白さのひとつは、清水が構築した重厚な家族・親族理論に対して、執筆者がそれぞれの視点から、再検討を挑む点にあるだろう。例えばパプアニューギニアのアンガーティヤの人々の家族の紐帯について論じた吉田（第1章）は、家族関係の最も顕著な特徴を、その呪術的な性格に求める清水の議論を踏襲する立場をとる。しかし清水が、家族関係の起源としての身体的ないし霊的要素の連続性に注目したのに対して、吉田は、ある者とその目の前にいる者との関わり方、とりわけ食物を与える行為と、与えられた経験とに注目する。そのことで吉田は、「他人との関係の中で形成され、維持され、生きられる」

（p.47）ものとしての共在の論理を前景に押し出すのである。他方で、現代韓国の家族について論じた岡田（第5章）は、家族の一般理論構築を指向する清水の議論が、儒教的伝統の特殊性を重視する東アジア研究者には容易に受け入れられなかったこと、また1990年代には、人類学における親族研究そのものが、行き詰まりの状況にあったことを指摘している。その上で岡田は、現代韓国社会における家族イデオロギーの重層性、そこに新生殖技術が与える複雑なインパクトを読み込みながら、人類学者がふたたび家族の一般理論を目指す必要を説いている。

本書について、もうひとつ注目すべき点は、暴力の問題を通して共在の困難を論じようとする論考（第4、7、8、9、12、14章）が目立つことである。例えば渥美の目は、カナダ先住民サーニッチが日常のなかで経験する暴力に向けられている（第7章）。彼らが置かれた植民地状況の暴力性に加えて、その状況を克服しようとする運動の中にさえ、暴力は深く潜入している。渥美が述べるように、サーニッチの若者たちは、暴力的な状況を「生き抜く」（p.196）ことによって自らの歴史を語るのである。他方で中野は、インドネシアのバリ社会において、労働移民に対する暴力が蔓延しつつある事態に目を向けている（14章）。この問題を、バリ文化の権力化、つまり国際観光産業の中で特権的な地位を占めることに成功したバリの文化ナショナリズムと結びつける議論に対して、中野は「的を射ていない」と述べる（p.369）。中野がここでとらえようとしているのは、権力やナショナリズムといった装置を迂回して人々の共同性の中に侵入する、抽象的な暴力性の問題ではなく、人々が共に在る在り方そのもの（中野はこれを、「人間が共同性を作り上げる原理」と表現している）に関わるような、生々しい暴力であるように思われる。

本書の「はじめに」で述べられているように、秩序の形成には必ず選別と排除が伴う（選別と排除の暴力がはたらく）のであり、いったん排除されたものと向かい合い対話す

ることは、人類学者にとって「対象をできる限り十全に把握しようとする構え」(p.5)であると同時に「自己を変えてゆく企て」(p.7)でもある。こうした「構え」「企て」によって、家族、先住民、メディア、あるいは人類学そのものの構築といった問題に迫る試みが持つ可能性の大きさを、本書は示している。